

「はい、鈴木歯科医院です」

「予約をお願いしたいのですが」

「こちらの医院へおいでになるのは初めてですか？」

「いえ、随分前に一度通ったことがあります、本当に暫くぶりです」

「それではお名前をフルネームでお願いします」

「斉藤慎二です」

「申し訳ありません。少し声が遠いのですが、もう一度お名前よろしいですか？」

「斉藤慎二です」

「斉藤慎二さんですね。ご住所もお願いします」

「横浜市瀬谷区下瀬谷三十一―一です」

「こちらに通っていたのはいつ頃か覚えていらっしゃいますか？」

「ええと・・・三年ぐらい前だったと思います」

「わかりました。今カルテの確認をしてみますのでお待ち下さい」

斉藤は電話口で暫く待たされた。

「お待たせいたしました。斉藤慎二さんのカルテの確認ができました。斉藤さんの前回の治療は平成十三年の四月で終わられていますね。担当の先生は原田先生でしたので、原田先生の治療で予約の時間をお調べします。現在痛みが激しくて仕方ないということはありませんか？」

「いえ、大丈夫です」

「それでは、予約はいつがいいでしょうか？」

「一番早く予約がとれるのはいつでしょうか？」

「そうですね。一番早いのが今週の金曜日の七時半になります」

「すいません。曜日はいつでも構いませんが、午後ではなくて午前中に、それできれば朝一番の時間がいいのですが」

「朝一番というと九時になります。その時間で一番早くとれる日となりますと、来週の水曜日になります」

「はい、その時間で結構です」

「では来週の水曜日の九時に予約を入れておきます。当日は保険証をお持ちくださいね」

「わかりました。よろしく願います」

当日、斉藤は予約時間の十分ほど前に鈴木歯科医院に着き、少し緊張しながらドアを開けて中に入った。

「おはようございます。九時に予約をお願いした斉藤慎二ですが・・・」

「斉藤慎二さんですね。おはようございます。今日は保険証はお持ちになりましたか？」

「はい、持ってきました」

「ではお預かりします。それから、こちらの用紙に現在の歯の状況について簡単に記入をお願いします。記入が終了したらそちらのソファアにお掛けになってお待ち下さい」

「はい、わかりました」

斉藤は記入を終えるとソファアに座り、名前が呼ばれるのを静かに待った。